食育への関心と栄養表示読み取りに関する各年代の特徴

○山本麻理奈・清水裕子（香川大学）

キーワード：栄養，食育，栄養表示

目的

わが国では、がんや心疾患、脳血管疾患など、生活習慣に起因する病で死亡する者が多い。生活習慣の中でも、疾病の予防・療養に食生活が重要であることは知られており、国は国民が生涯にわたって健全な心身を培い、豊かな人間性を育むことを目的に「食育」を推進してきた。しかし、「食育」を教育課程で学んできた若者世代への定着が乏しいこと、認知･関心･活動には対象属性間で差があることが指摘されている。このような状況から、対象によって食育の方法は検討する必要があると考えた。本研究では対象属性の内、年齢に注目し、食育への関心と年齢にどのような特徴があるのかを考察する。また、食育の定着について考える上で食品選択に関わる栄養表示読み取りの傾向に注目し、世代ごとの特徴を把握する。年代間の特徴を明らかにすることで、今後の疾病予防・療養に関わる食育方法について検討する基礎資料とする。

方　法

本研究は、既存資料を用いた関連探索型研究である。

本研究における二次分析の対象は、食育に関する意識を調査した「食育に関する意識調査 2007」、「食育に関する意識調査 2014」、栄養表示について調査した「栄養表示に関する消費者読み取り等調査事業 2014」の合計 3 つの調査である。

「食育に関する意識調査 2007」に対しては食育への関心と年齢群、食育の実践と年齢群、「食育に関する意識調査 2014」に対しては食育への関心と年齢群についてクロス表を作成し、カイ二乗検定を実施した。また、調整済み残差を算出し Haberman の残差分析を行った。「栄養表示に関する消費者読み取り等調査事業 2014」に対しては、普段の食品購入時に参考にする栄養成分表示の、それぞれ裏面、表面と年齢群についてカイ二乗検定を実施し調整済み残差を算出した。統計には SPSS Statistics ver.24 を使用した。本研究は二次資料分析のため、香川大学医学部倫理委員会の承認を必要としなかった。開示すべき利益相反関係にある企業などはない

結　果

分析の結果、「食育に関する意識調査 2007」では食育への関心と年齢群（X^2=119.701 df=20 p＜0.01）、食育の実践と年齢群（X^2=188.025 df=25 p＜0.01）の間でそれぞれ有意差がみられた。残差分析の結果、60 歳代は食育に「関心がある」、20 歳代、30 歳代は「どちらかといえば関心がある」「どちらかといえば関心がない」と回答した者が他の年代より多かった。70 歳代以上では「関心がない」「わからない」と回答した者が他の年代より多かった（表 1）。食育の実践と年齢群では、60 歳代で「積極的にしている」、20 歳代、30 歳代は「あまりしていない」と回答したものが他の年代より多かった。70 歳代では「わからない」と回答した者が他の年代よりも多かった。「食育に関する意識調査 2014」では食育への関心と年齢群（X^2=64.303 df=20 p＜0.01）の間に有意差がみられた。残差分析の結果、70 歳代と 60 歳代で「関心がある」、20 歳代、40 歳代では「どちらかといえば関心がある」と回答した者が他の年代よりも多かった。70 歳代では「関心がない」「わからない」と回答した者が多かった（表 1）。

「栄養表示に関する消費者読み取り等調査事業 2014」では普段の食品購入時に表面を参考にする群と年齢群の間に有意な結果が得られなかった。裏面を参考にする群と年齢群（X^2=44.703 df=20 p＜0.01）の間には有意差がみられた。20 歳代は他の年代よりも裏面を「いつも参考する」「ほとんど参考にしない」と回答した者が多く、60 歳代では「あまり参考にしない」と他の年代よりも回答した者が多かった。

表1　年齢群と食育への関心（2007）（2014）のクロス表（人）

	関心がある		どちらかといえば関心がある		どちらかといえば関心がない		関心がない		わからない	
年代	07	14	07	14	07	14	07	14	07	14
20歳代	32	26	71	61	43	34	25	17	3	2
調整済み残差	-5.11**	-3.96**	2.17*	2.23*	2.90**	1.59	1.26	0.60	-0.39	-0.05
30歳代	93	74	123	99	65	47	20	26	7	1
調整済み残差	-2.37*	-1.36	2.66**	1.83	2.17*	-0.07	-3.01**	-0.06	0.19	-1.51
40歳代	95	104	110	138	59	60	31	25	2	3
調整済み残差	-1.61	-0.96	1.44	2.90**	1.50	-0.51	-0.61	-1.99*	-1.90	-0.95
50歳代	126	100	132	106	61	65	49	29	4	4
調整済み残差	-1.00	-0.35	0.943	-0.02	-0.28	1.06	1.16	-0.68	-1.58	-0.26
60歳代	187	145	96	121	51	77	34	34	8	4
調整済み残差	6.18**	1.99*	-3.64**	-1.46	-1.92	0.57	-1.66	-1.22	-0.00	-0.78
70歳以上	128	167	80	112	30	67	51	63	15	13
調整済み残差	2.39*	2.87**	-2.88**	-4.12**	-3.57**	-1.97*	3.18**	3.26**	3.71**	3.11**

調整済み残差の分析結果：*p<0.05 **p<0.01

考　察

食育に関する関心は 60 歳代で高まり、実践される傾向があることが分かった青年期から壮年期にあたる年代では、就学時に教育を受けた者やその親が含まれるため、食育の知識はあるが、自身の健康と関連付けるような疾病の罹患などが少ないため、関心は高くないと考えられる。また、栄養表示の読み取りに関しては、製品表面の表示は意識せずとも多くの人の目に触れるため、年代間の違いはなかったと考えられる。しかし、裏面の表示はより詳細な記載となるため、年代間に差がみられたと考える。20 歳代に裏面を参考にする者が多かったのは、若年者にダイエットややせ願望を持つものが含まれることが影響していると考えられ、食育の定着の結果とは言えないと考えた。また、食育の関心と栄養表示の読み取りのいずれも高齢者で関心･知識が乏しいことが分かった。

謝辞

〔二次分析〕に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブから〔「食育に関する意識調査，2008」「食育に関する意識調査，2014」（農林水産省 消費・安全局 消費者行政・食育課）〕〔「平成 25 年度消費者庁予算事業 栄養表示に関する消費者読み取り等調査（インターネット調査），2014」（消費者庁次長）〕の個票データの提供を受けました。

(YAMAMOTO Marina, SHIMIZU Hiroko)